第6章 クロノス

01 — 主体のない契約

軍の別館は、マーラ・センが見せてくれたどの地図にも載っていなかった。入口は旧ヘリックス工場裏の業務道路に面し、かつては医療設備を積んだ貨物車が行き交っていた。いまは柵が空の構内を囲み、銅製の文字を剥がされた記念碑だけが残っている。誰かが建物を取り壊す手間をかけずに、その用途だけを消そうとしたのだ。

夜明けとともに、ロイはレイチェルとクロノスを連れて到着した。ヌルは外に残り、隔離された市の通信周波数を監視している。ベクターは中へ入ることを断った。五人の元追跡者が何をするために作られたにせよ、仲間の出自を調べるのに武装した五人全員が必要なわけではない、というのが彼の考えだった。

独立審査委員会からは、範囲を限定した捜索許可が出ていた。ダニエル・リードの名が記された資料と、MBU-09の人格継続計画に関する記録は調べられる。しかし、無関係な患者の資料を持ち出すことも、休止中の装置を作動させることもできない。ロイは条件を二度読んだ。救助を行う側が自分たちの善意を信じきったと

き、それがいかに容易に占領へ変わるかを知っていたからだ。

入口の先には、手書きで記録を扱う事務机があった。引き出しからレイチェルが見つけたのは、三つの署名欄を持つ調達契約書だった。ヘリックス社は交換用組織を供給する。国防研究所は作戦用の身体を用意する。そして三つ目の欄には《主体》と見出しがあるだけで、署名は空白のままだった。

「本人に聞きもしないで、その人について契約を結んだのね」とレイチェル。

クロノスは書類を受け取ったが、空白には触れなかった。「その人がまだ存在するか、決められなかったのかもしれない」

「それなら、待つべき理由になったはずだ」とロイ。「署名する理由にはならない」

契約書の下部には小さな注記があった。《既存の人格継続資産を移管。新たな同意は不要》。クロノスは目をそらした。ダニエルの二度目の退職届で見た表現だった。診療所から軍へと追いかけてきたその言葉は、制服を着替えただけだった。

02 — 目的のために作られた身体

貨物用昇降機の下に設計室があった。二つの作業台には、大人より小さな身体に合わせた廃棄済みの関節部品が置かれている。技術者たちは提案した骨格の利点を残らず記録していた。消費エネ

ルギーの少なさ、狭い整備用シャフトへの進入能力、崩壊した構造物内を目立たず移動できること、高負荷の認知処理中でも冷却しやすいこと。

その身体が少年の姿に設計されたのは、優しさからではなかった。大人には容易にできない仕事をさせるためだった。

「『若年型プロファイル』ですって」と、古い設計概要を読むレイチェル。「あまりにも普通に聞こえる言葉で、嫌になるわ」

クロノスは未完成の腕の横に立った。自分の手とほとんど同じ長さだった。「目を覚ましていたら、僕自身がそれを選んだかもしれない」と言った。

「そうかもしれない」とロイ。

「だったら、彼らのしたことは許されるの？」

「いや。お前が選んだかもしれないことを、ほかの誰かがお前の代わりに決めていいわけじゃない」

後年の文書には、ダニエル・リードが適任とされた理由が並んでいた。生きた神経接続に関する専門知識は、部隊が生体電気の異常を読み取る助けになる。何度も身体を再建していたため、通常の登録制度では本人確認が難しい。評価書は、安定した民間人としての経歴なしに活動できることを長所として称賛していた。ロイには適性ではなく、弱みを列挙しているように聞こえた。

クロノスは自分についての記述を読み、面白くもなさそうに一度笑った。「配管に入れて、いなくなっても誰にも行き先を聞かれない人が欲しかったんだ」

「聞く人はいたわ」とレイチェル。「返事をもらえなくなった人たちもいた」

彼女は、ダニエルをかつて治療していた民間の診療所へ宛てた、送られなかった手紙を発見した。差出人は元患者がまだ生きているかを尋ねていた。印刷された返答は一行だけだった。《現在、該当する個人の登録なし》。

03 — 最初の名前

記録に《クロノス》という名が現れるのは、特定の移管日以降だけだった。それ以前の人事資料には、ダニエル・リードの名に続いて、患者、研究者、従属契約者、そして最後には《人格継続素材》と記されている。年を経るごとに分類は狭くなった。軍に受け入れられるころには、人間の名前は物流上の邪魔者になっていた。

軍用コードネームの由来は、拍子抜けするほどささやかなものだった。受け入れ担当官が、名簿上の別の個体と混同しない呼称を必要としていた。技師が《クロノス》を提案したのは、対象者の記録がこの計画の耐用年数よりはるかに長い期間に及んでいたからだ。担当官は二文字のイニシャルを記して承認した。

その名に予言はなかった。時間を支配する者を見いだした者もいない。ただ、書き込むことの多い書類の略称として始まった。

「きっと理由があるんだと思ってた」とクロノス。

「あったさ」とロイ。「たいした理由じゃなかったけどな」

「ほかの名前が使われていたから選ばれた言葉にふさわしくなろうと、僕はずっとしてきたんだ」

レイチェルは紙焼き写真の端に触れた。研究台のそばに立つ、若いダニエルとJ・F・セバスチャン。青年は何かに気を取られた表情で、首元のネクタイもひどく曲がっていた。ある午後、彼が遺伝子配列の試料にコーヒーをこぼし、一時間かけて後片付けをしたことを彼女は覚えていた。セバスチャンは、その事故で実験がむしろよくなったと言い張っていた。

「ダニエルは平凡な名前が好きだったわ」とレイチェル。「タイレル社の計画名は、実際の研究内容に比べて大げさすぎるって、いつも文句を言っていた」

クロノスは写真を眺めた。「僕にダニエルと名乗ってほしい？」

「いいえ」と彼女。「彼が存在したことを知ってほしいだけ。自分を何と呼ぶかは、あなたが決めることよ」

04 — 五人は一つではなかった

設計室の先にはMBU-09の訓練室があった。五つの訓練席は共通の操作盤の周りに並ぶのではなく、厚い仕切りで隔てられていた。戦術報告には、ほとんどの演習で意見が割れたことが記されている。ゴリアテは事前警告のない突入に反対し、シェイドは標的の身元が争われているときには撤退を支持した。ベクターは偽りの確実性に基づく計算を拒み、ヌルは通信の独立した複製を保存した。最も小さなクロノスは、標的を追う根拠とされた記憶について質問していた。

組織はそうした不一致を《不安定性》と呼んだ。教官たちは個性を、除去すべき欠陥へ変えようとしていた。

ある記録の中でクロノスは、データベースで死亡と宣告された人物にも処置を拒む権利があるのかと尋ねていた。教官は、その問いは演習の条件から外れると答えた。クロノスは繰り返し聞いた。記録は、その授業への彼の参加資格を取り消す命令で終わっていた。

「僕たちは一つの心じゃなかった」とクロノス。「彼らは知ってた」

「なのに、一人ひとりの違いを故障として扱ったのね」とレイチェル。

別の端末から、制御仕様が見つかった。各個体には遠隔拘束機構と、最終的な破壊手段が備えられていた。同一の権限が両方を発動するには、記録された緊急事由が必要だった。設計者は服従だ

けでは足りないと考えていたのだ。さらに、初期の実地試験の後で独立した物理インターロックが追加され、審査を経ない同時停止は技術的に信頼できない仕組みになっていた。

ロイは、ほかの四人が回収命令から生き延びた理由を理解した。奇跡でも、秘密の無敵性でもない。政府は権限のない破壊を防ぐ保護機構を作り、指揮権限が分裂したとき、それが働いた。四人もそれぞれ自分の制御経路を隔離していた。一つのスイッチが五人全員へ届くことはなかった。

そしてクロノスの記録を開いた。ほかの四人と異なり、最後の行には《中断》ではなく《実行・確認済み》とあった。

05 — 終わった瞬間

停止記録には時刻、場所、出力値、そして三つの独立した確認応答が記されていた。クロノスが、回収可能な記憶基盤に分類された民間人の特定への協力を拒んだ後、医務室で処理が始まった。争った記録はない。目撃者が残したのは、拒否すれば自分は解体されるのかと少年が尋ねた、という一文だけだった。

一分後、監視系は軍用身体の神経活動が完全に停止したと記録した。

建物の外からヌルが暗号署名を検証した。後日、偽造されたファイルが資料庫へ紛れ込んだわけではない。誰かが命令を出した。命令は対象へ届いた。システムは停止を観測した。だが、その後

誰が再び生き始めたのかは説明されていなかった。

「センサーが故障した可能性は？」とロイ。

「もちろんあるわ」とレイチェル。「でも慰めになる可能性を選ぶのではなく、証拠が必要よ」

クロノスは診察台の端に座っていた。白い天井を覚えていた。プラスチックのコップに入った水の味も、もう一杯を得るためには誰かを傷つけるよう命じられるのではないかという恐怖も覚えていた。終わりの瞬間は覚えていない。もう一度目を覚ましたことも。

「その一分の後に何があるのか、分からない」と彼は言った。「あそこにいた人の記憶を持っていると思い込んでいるだけだったら？」

ロイは、少年がダニエルであるとも、そうでないとも言わなかった。測定器を支配する人々から自分についての答えを押し付けられてきた年月は、あまりにも長い。

「なら、何が起きたかを調べよう」とロイ。「どこまで調べるかは、お前が決める」

クロノスは画面を見つめた。「誰かが僕に聞かずに、僕を戻したのか知りたい」

06 — 隠された整備回線

停止から十八時間後に提出された二通目の報告書があった。患者についてではなく、整備上の異常についての報告だった。輸送技師は、休止した神経接続機構が少量の電流を安定して消費し続けていることに気づいた。技師はその回路を隔離し、点検を申請した。だが、点検に対する返答は記録に残っていない。

電流は身体の主電源を通っていなかった。部隊が停止している間、校正データを保持するためのサービス回路から来ていた。設計者はそれを不活性の記憶装置と記述していた。しかし記録には、電池の一定した放電ではなく、規則的な変動が示されていた。

「信号があることは、誰かが生きていた証明にはならないわ」とレイチェル。「反射的な回路かもしれないし、止まらなかった診断処理も似たものになる」

「でも誰かが調べるべきだった」とクロノス。

ヌルが新しい発見を送ってきた。整備回路は物理ケーブルにつながっており、もう一方の端は軍別館の設計図に記載されていなかった。ケーブルは旧ヘリックス治療用トンネルへ向かって下降している。国防契約の終了後、封鎖された区画だ。

ロイは移動する前に独立審査委員会へ連絡した。委員会はケーブルの経路をたどることは許したが、装置を接続することは禁じた。その違いは重要だった。アクセスできるからといって、行使する許可があるわけではないと、彼らはすでに学んでいた。

階段の下で、クロノスは細い扉の前に立ち止まった。見る前から取っ手の位置が分かっていた。廊下の記憶が浮かんだ。白衣の男がコーヒーを二杯運んでいる。一杯は両手のふさがった同僚のためのものだ。それがダニエルの記憶なのか、後の身体のものなのか、それとも以前に見た映像なのか、少年には分からなかった。

彼は不確かさを隠さず、そのまま受け止めた。

07 — 扉の前の選択

施錠された扉には、古いヘリックス社の患者権利に関する掲示があった。最後の一文を除いて印刷は薄れていた。《十分な説明を受けた同意なしに、処置を行ってはならない》。誰かが《十分な説明を受けた》という部分に線を引き、残りは消さずにいた。

ロイなら錠を壊せた。だがクロノスはやめてほしいと言った。誰かが室内の状態を変える前に、マーラに掲示を見てほしかったし、封印の状態も証人に記録してほしかったのだ。待つのは落ち着かなかった。壁の向こうからは、何かが一定のリズムを探しているような、低い機械音が不規則に響いていた。

レイチェルは待つ間、もう一度ダニエルの写真を見せた。「彼の人生を欲しがる必要はないのよ」と言った。「それが自分の人生だったと信じる必要さえない」

「もし僕が彼になりたいと思ったら？」

「その願いが、あなた自身のものかどうかを考えるの」

マーラが到着し、錠の金属板を見てすぐに気づいた。旧人格継続病棟で使われた型式だった。患者は通常の治療を受ける権利を失わずに、実験的処置を中止できる仕組みである。ダニエルは初期規則の作成に協力していた。後にヘリックス社は、公開する契約文書からその条項を削りながら、扉の掲示はそのままにしていた。

マーラは証人用カメラの下に物理封印を取り付けた。クロノスは自分で封印を破るよう求められた。ためらった末、彼はロイに後ろへ下がってほしいと頼んだ。

「あなたたちが答えを必要としているから開けるんじゃない」と少年。「僕が知りたいから開けるんだ」

扉は内側へ動いた。その向こうには接続を切られたモニター群と、同じ微かな脈動を発し続ける端末が一台あった。

08 — 人間は復元ファイルではない

端末には通常のネットワークアドレスがなかった。取り外し可能な媒体へ記録するために設計されていたが、その媒体はなくなっていた。整備画面に表示されているのは三つの日付だけ。ダニエル・リードの最初の再建、軍によるクロノスの停止、そしてその七か月後に記録された出来事。最後の項目には署名も、操作者も、何が行われたのかという説明もなかった。

レイチェルは二番目と三番目の日付を比べた。途切れない生存記録と考えるには間隔が長すぎる。しかし、新しい意識が創られた証拠にもならない。記録が欠けているのかもしれない。休止した生体活動が続いていたのかもしれない。意図的な介入があったのかもしれない。彼女は慰めになるというだけで説明を選ぶことを拒んだ。

そのときクロノスは、モニター筐体の裏側に刻まれた一文を見つけた。その筆跡は数十年前、ダニエル本人が書いたとされる見本と一致した。

《目覚めたとき、彼らが私の名前を与えたなら、自分は何と呼ばれたいのかを問うこと》

クロノスは声に出して読んだ。別館に入って以来初めて、無理のない笑みを浮かべた。彼の過去にいた誰かは、未来の一人に名前を割り当てるのではなく、質問を与えるべきだと考えていたのだ。

「それで、お前は何と呼ばれたい？」とロイ。

「クロノス」と少年。「今はね」

外の門で動きがあったとヌルが知らせた。兵士ではない。以前の緊急許可に応じて派遣された独立監査官たちだった。審査委員会が、ようやく元の停止証拠を入手した。資料は保全され、この部屋も法に従う調査のため開かれたままになる。

立ち去る前にレイチェルは碑文を撮影してよいか尋ねた。クロノスは了承した。彼女は署名のない三つ目の記録と一緒に撮り、文字も不確実性も切り取らないようにした。

廊下でロイは扉の向こうの弱い脈動を振り返った。誰が戻ったのかは、まだ分からない。だが、日付と場所と、調べ続ける理由は得られた。

外では朝日が空の構内に差し込んでいた。ゴリアテ、シェイド、ベクター、ヌルは市内の別々の場所で生きている。政府が阻めなかった、それぞれの選択を行いながら。クロノスはロイの隣を歩いた。回収された所有物でも、解決済みの歴史的な謎でもない。

今は、それで十分だった。